
鴨の流れの

万里小路 まこと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴨の流れの

【Nコード】

N1661G

【作者名】

万里小路 まこと

【あらすじ】

京都の街を流れる鴨川。その流れに乗せ、一人の男の独白が始まる。

私がここへ越してきてからもう一年余りが過ぎた。

目の前には鴨川が流れ、陽光を浴びて金系銀系を織り込んだ西陣の反物のように輝く。その清き水面には水鳥が遊び、とんびがくるりと空を舞う。目を上げれば街並みの向こうには比叡より連なる東山の峰々が横たわる。その青々とした姿は千年の時を超え、この街とそこに暮らす人々の営みを見守ってきた。かつて通った大学の校歌に謳われる光景そのものが、いま私の目の前に広がっている。

シギがつい　　と、目の前を横切っていった。

夕暮れ時、鴨の流れを眺めながら、ふと我が来し方を思い浮かべてみる。

無気力・無感動・無関心の三無主義と先輩に後ろ指を指されながら、急速に収束していく学生運動を尻目に大学生生活を送っていたのはもう三十年以上も前になる。

ヘルメットをかぶってゲバ棒を振り回してもしらけるだけだし、大学にはもつと楽しいことがたくさんあるだろうにと思っていた。時代遅れの政治論をかましては口角泡を飛ばす教授の話など聴く気にならず、教科書はもっぱら枕代わりでしかなかった。

午前中で授業を切り上げたあとは、仲間の家で麻雀をするか憂さ晴らしに鴨川の河原でギターばかり弾く日々を過ごした。もちろん、試験前以外にろくに勉強をした記憶がない。当然これといった目標もなく、何か努力したところで何も変わらない、何も変えられないと思っていた。

今が楽しければそれでよし。いつも私が苦々しく見ている学生とおぼしきアベックの姿は、実はあの日の私そのものだったのかも知れない。測ったかのように河原に等間隔に並んで座り、額を寄せ語り合うもの、口づけを交わす者、熱い抱擁を見せる者たち。若さに

裏付けられた底抜けな輝きに満ちた時代が、この私にもあったのだ。そう、今でこそこの有り様だが、学生時代には人並みに恋もした。当時付き合っていた娘は私が悪友とやっていた鴨川ライブの数少ない観客の一人だった。ひとつ年下の文学部生。周りは地方出身者ばかり、私自身も岡山から出てきた身だったから、京都生まれ京都育ちの彼女は輝いて見えた。

同年代の女の子たちが西城秀樹やらアイドル新御三家に夢中になる中、吉田拓郎や泉谷しげるが好きな変わった娘で、文庫本片手に地べたに体操座りをして、私のかき鳴らすギターに耳を傾けていたのを思い出す。

そして金のない私たちは、いつも鴨川の河原でデートをした。荒神橋から四条大橋へ。頬を真っ赤に染めながら初めて手をつないだ葵祭の日も、緊張に息をつまらせながら初めてキスをした祇園祭の夜も、隣には鴨の流れがあった。

陽はとっぷりと西山に沈み、みそそぎ川にせり出した店々の川床が流し燈籠のようにぼんやりとした明かりを川面に映し始めた。

遊び呆けてばかりいた私がどうにか大学を卒業したのはオイルショック後の不景気の真っ只中で、苦労しながらも東京の水産会社に就職することができた。

母親の涙に背を押され、成功を心に誓って東京へ出たのは良かったが、岡山弁を訛りと馬鹿にされ、なかなか上がらない営業成績に頭を抱える日々が続いた。いい歳をして上司に怒鳴られたり、客に小突かれたりしたときには本当に気が滅入ったものだ。

何度、荷物をまとめて故郷へ帰ろうと思ったことか。それでも逃げ出さずやってこられたのは、卒業後すぐに私のあとを追って上京してきた彼女の存在によるところが大きかった。来てしもた、と悪びれずに笑う彼女の顔をアパートの扉の先に見たときには卒倒しそうになったが。

東京で迎える二度目の夏を前に私たちは狭いアパートの一室で同

棲を始め、三度目の春が来たとき彼女の両親のもとへ挨拶に行った。腕を組みじつと私を睨みつけるお義父さんのあの顔を思い出すたび、今でも身がすくむ。駆け落ちも同然だった私たちの結婚をよく許してくれたと思う。

クスッと笑い声が聞こえた気がして、ふと横を見る。あの頃とほとんど変わらぬ美しさをたたえた妻が、私に微笑みかける。いや、ちょっと昔を思い出していただけさ、とひとりつぶやく。

気づけば夜もだいぶ更けてきた。あれだけ並んでいたアベックたちの姿もどこかへ消え、もう終電も行ってしまったのだろう、煌々と灯っていた三条京阪界隈の明かりもすっかり落ちていく。ただ轟々と水の流れる音だけが耳に入ってくる。これからは誰にも邪魔されることのない、私たちだけの時間だ。

お世辞にも成功したとは言えない半生だった。何を為した訳でもない、ただ平平凡凡と齢を重ねてきただけの男だ。それでも、人並み以上に幸せだったことは胸を張って言える。

結婚してから二年と少し、私たちは娘を授かった。女の子は父親に似るとよく言われるが、幸いにも母親に似てくれた。眉のきりっとした少し太いところや黒目がちの眼、鼻すじの通り具合はまさに妻そのものだ。そして事あるたびに発揮される一本芯の通ったところも、妻からの遺伝と言うべきか。だがその一方で、素直で心優しかった。感性豊かにのびのびと育ったその子は、人一倍利発で、美しい女性に成長した。

彼女の存在は妻とともに私の人生における最大の自慢の種であった。目に入れても痛くないと簡単に言う親は数多存在するが、わが娘のためなら命をなげうってでも、どんなことでもやってみせられる自信があった。

その娘が社会人になってしばらく経ったころ、お父さんに紹介したい人がいると言って一人の青年を連れて帰ってきた。私には内緒にしていたが、どうやら彼とは学生時代から付き合っていたらしい。

変な虫がつかないようと女子大に入れた私の儂い願いは、私の全く知らないところで早々に崩れ去っていたのだった。

岩をも貫くような真面目な瞳でお嬢さんをください、などとその青年は古風なことを言った。ここは一応は父親らしく振舞っておくのが礼儀だと思った私は、小難しい顔をつくって腕を組み、彼の顔を見つめてみた。あの日のお義父さんのように。しかしその頭の中では、すでに白無垢に包まれた娘の晴れ姿を思い浮かべていたのだ。そんな本心を見透かすかのように、妻は終始嬉しそうな顔をしていたのを思い出す。その柔らかな笑顔は、あの日のお義母さんの表情そのものだった。

どこかで、カラスがぎゃあと鳴いた。真夜中の、すべてを溶かしてしまふ漆黒の空に向かって、いったい何を伝えようとしているのだろうか。

あの日 祇園祭の宵山の日
朝から雨が降り続いていたといふ。

七月、独身生活最後の記念にと、妻と娘は京都へ旅行に出掛けていた。私たちの思い出の地へ。娘はずっと東京で育ってきたから、京都へは数えるほどしか行ったことがなかった。妻の実家を訪れるでも、観光スポット巡りをするでもない。結婚式を目前に控え、自分の両親がどんな場所で出会い、時を重ねたのか見ておきたくなっただのと、旅立ちの前日、彼女は私にそつと話してくれた。

夜。京都盆地の釜の底に一服の涼をもたらした雨は上がり、祭に押し寄せる人々の熱気が四条通を支配する。

豪華絢爛に飾りを施された山や鉾は町の誇りを一手に背負い、その壮麗さを競いあうかのように立ち並ぶ。ゆらめく提灯はかつて都に猖獗を極めた疫病の犠牲者の御魂に似て、祭囃子のゆったりとした笛の音鉦の音は、彼らを常世へと導くかのようにその調子を響かせる。

道行く人に撮ってもらったのであろう、長刀鉾を背景に笑顔を見

せる二人の浴衣姿　　が写真に残っている。

それから彼女たちは、先斗町の、町家を改造したフレンチの店で食事をした　　という記録が残っている。

宿へ向かう二人は、雨に濡れた石畳がしっとりとした光沢を放つ先斗町通から、高瀬川に柳のゆれる木屋町通へ。そして青白くライトアップされた中央分離帯の噴水を横目に御池通を渡るうとした。

そのとき。河原町御池の角を左折してきた青いトラックが速度を緩めることもなく信号を無視して交差点に進入した。横断歩道を渡っていた二人はフロントガラスに貼りつく格好になったあと、そろって真夏の蒸し暑い空を舞い、黒くねっとり光るアスファルトにたたきつけられた。そして、トラックは走り去った。

目撃者の言によれば。

警察に聞いたところによると、二人ともほぼ即死だったらしい。痛みを感じる間さえなかっただろうと自分に言い聞かせるのが精一杯だった。死の知らせを聞いた私は東京駅八重洲口で列を作っていた学生に倍の金額を払って切符をもぎ取り、夜行バスで京都へ向かった。

無限とも思える時間ののちたどりついたのは、鴨川が目の前を流れる大学病院の霊安室。だった。医師や警官が何か話してくれたのは覚えてるが、そんなものは全く耳に入っていなかった。

つい半日前まで妻や娘の姿を写していたカメラは遺品となり、私の腕の中で鈍い重みを放っていた。そのひび割れたレンズのように、私の瞳には何も映らなかった。映したくもなかった。そして人間は、本当に打ちひしがれたときには一滴の涙も一節の言葉も出ないのだということを知った。

生ぬるい吐息のような風に、風鈴がちんと鳴った。学生時代、四畳半一間の私の下宿にぶら下げていたものだ。天神さん行ったときに見つけてん、と軒先に吊るす彼女のワンピース姿が目につかぶ。だが、そんなささやかな思い出さえ共に語る相手はもう居ない。風

鈴もいつの日だったか縁が欠けてしまった。

愛する妻と我が子を失った私の人生は、坂道を転がる石ころよりも早く落ちぶれていった。何の仕事をしても全く手につかない。凡そやる気だとか熱意だとか呼べるものは、あの日棺桶に入れた思い出の品とともに灰になってしまったのだろう。そんな気がした。

そして飲めない酒に手を出しては飲まれて潰され、警察の厄介になることも一度や二度ではなかった。埋めても埋めても塞がることのない心のすき間はやがて、修復のしようのない破綻を私にもたらした。

解雇。右肩下がりの台所事情でリストラを進めたい会社にとって、私の素行の悪さは丁度よい標的となったのである。

ある日、もはや何回目かも忘れたが留置場で朝を迎えた私は、警官の嚴重注意に形式的に頭を下げ、家に帰ることもなくヨレヨレのスーツを着たまま出勤した。その直後、上司に呼ばれて何の前触れもなく解雇を言い渡された。土下座でもして何とか置いてもらおうかとも思ったが、一度欠けてしまった風鈴はもう何をしても響くことはない。私は簡単に挨拶だけ済ますと、その日のうちに会社の荷物をすべて処分した。

そうして会社をクビになり人生にとどめを刺された私は、生ける屍と化した。残りの人生など消化試合ほどの存在価値すらない。何も考えず、何を為すこともない。心臓が最後の一拍を打ち終えて沈黙し酸素の供給を止められるまで、失った者の記憶が電気信号として壊れた通信機のように脳内で発信され続けるだけなのだ。

だがそうなる前に、脳は最後の思考を行った。私はその決定にもとづき、一切の家財を売り払って家を出た。手元に残したのは妻と娘との有形無形の絆と、いくばくかの現金のみ。西へ西へと流れに流れ、たどりついたのがこの場所だった。

三条大橋の西詰、橋台の下の二畳半ほどの空間。

私は乞食に身を落としたのだ。

空を覆っていた闇を鴨川へと押し流して、大文字山から朝日が昇る。

この商売は朝が肝心だ。昨日のうちに公園で汲んでおいた水で顔を洗い、五日前に消費期限の切れたパンを頬張りながら出かける準備をする。ポケットには手製の地図、自転車には工事現場で拾ってきたPP袋とビニール紐。

若者たちが置いて行った花火の残滓を横目に、河原からならだと坂をのぼっていく。このあたりが親不孝通と呼ばれていたのはいつの頃だったか。弥次喜多像の前にお供えでもするかのように置いて置かれたチューハイ缶の回収を皮切りに、今日は三条通を西へと進むことにする。

空き缶の拾い屋も他人が考えるほど楽なものではないのだと、実際に体を動かして初めて知った。ゴミ出し場はどこにあるのか、市が差し向ける回収業者は何時に来るのかをまとめてルート地図を作る。まるで外回りをやっていたあの日のように。加えてその地図に宵出し後出し 前日夜のうちにゴミ出しをしたり、当日回収が終わってから出したりする の家を書き込み、要所要所には同業者の縄張りも記しておく。そんなことまで頭に入れておかねば食ってはいけないのだ。そしてその作業をやっているときだけ、私は生を実感することができた。

だがそれでも現実には厳しい。アルミ缶二つで一円、一日中回りに回っても収入が三千円に届かない世界なのだから。会社勤めをしていた頃の十分の一に過ぎない。

もつとも、生きる甲斐を見つけた今の私には、収入のことなどはや何の関係もないのだ。

車もまばらな河原町通を渡る。カラオケ屋から出てきたアベックが、あからさまに汚いものを見下す目で私を睨む。化粧の落ちかけたタヌキのような顔でヨタヨタと歩く女の方がよほど汚いと思うが、目を伏せて足早に通り過ぎる。

私たちの世界では沈黙こそ美德だ。そして、目は口ほどに物を言う。

いつもぶら下げている帆布のずた袋の中、二葉の写真が入っている。片方は、長刀鉾をバックに妻と娘がVサインをしている写真。そしてもう一葉を手にするたび、私の体に電流が走る。

暗闇を背景に走るオレンジと青の幾本もの光の筋。あまりのブレように私自身、最初はただの失敗写真としか思えなかった。しかしこの写真があのカメラに残っていたフィルム最後のコマであり、青い灯火が噴水のイルミネーションだと気づいたとき、私の中で何かが弾けた。これは「あの」瞬間が収められたものなのだ。

あの時、アスファルトに打ちつけられた拍子に偶然シャッターがおりてしまったのであろう。私にはこの写真が、妻の瞳に映った最後の光景に思えた。そしてその瞳は、残るかすかな力を振り絞って一台の車の姿を視界の隅にとらえていた。

青色の中型トラック。目撃証言にあつたあの車と同じだった。

はじめはこの写真を警察に提出しようかとも思った。これを出せば目撃証言を裏付けるばかりか、事件解決への切り札となるかもしれない。しかしその頃の私の心の中では、そんな冷静な判断をあっさりとは吹き飛ばす疑問の嵐が吹き荒れていた。

長年連れ添ってきた妻と、輝かしい未来が待っている娘と。その娘とともに人生を歩んでくれる息子が居て、二人の間の新しい生命を心待ちにする。そんなはずだった。

それなのになぜ、私はいまこうして一人で居るのか。

何故、妻と娘はあんな死に方をしなくてはならなかったのか。

なぜ、あのとき運転手はあのまま逃げ去ったのか。

なぜ、こうして一番ワット数のちいさな電球の下で人形のような虚ろな目をして過去の思い出ばかりを振り返ってはいけな
いのか。

なぜ、何故、なぜ、何故、なぜ、何故、なぜ、何故……

いくつもの何故が反応し合い臨界点に達したとき、私の脳内に莫

大なエネルギーが生み出された。それは緩やかな死、生きたままの死へと向かいつつあった私に人生最後の、そして最大の決断をさせたのだった。

残された自分がすべきことは一つ。たとえそれが世間から見れば誤った決断であろうとも。妻と娘がそれを望んでいなくても。しかし私には道はないのだ。

他に失うものがない人間の最後の悪あがきは、このとき始まった。

おはようさん。三条通のアーケードを抜けたところの大きな力二の足元で、不意に声をかけられた。東本願寺の門前を寝ぐらにするアズマさんだった。もちろん誰も本名は知らない。彼は元々由緒ある呉服屋の若旦那だったが、嫁さんが入れあげた新興宗教に身ぐるみ持つていかれたらしい。こんな商売をしている人間は、みな大抵何かを背負って生きている。

例の井ゲタに京の字なあ、あれ滋賀の運送屋らしいわ。週に何回か山中越通って来てるんやて、と彼は言った。

写真に姿を残したトラックのボディ。ただでさえ暗いのにブレているおかげで社名やナンバーは読み取れなかったが、街灯の光を浴びた屋号だけははっきりと見て取れた。私は街角で同業者を見つけ、ては手がかりを探した。

井ゲタに京の字の話は人から人へ伝わっていったらしい。百万遍界隈を縄張りにする拾い屋の親爺が突然、ワシあの話知ってんねや、とアズマさんに話しかけてきたという。私がおおきに、これ、とウエスキーの小瓶を二本手渡すと、彼はワシらの情報網なめとつたらアカンわな、と真顔で返した。

そう、私たちは孤独に見えて実は人一倍横のつながりが強い。賞味期限切れ食品の回収に寛大な店、不良のガキ共の出没地点、ボランティア団体の支援活動の動向。そうでなければ、とうに野性を失った人間が身一つで生きていけるはずがない。

私たちは常に助け合う。己の背負った十字架を互いに支え合って

生きていかなば、いつかはその重みに身を潰されてしまう。

寺町通を抜け、御池通に出る。京都らしくない片側3車線の広々とした道は車の喧騒に溢れ、スーツ姿のサラリーマンたちは生き急ぐかのようにただ前だけを見つめ足早に歩いていく。地下鉄が到着したらしい。駅への入口からまた紺色や灰色の人の群れが吐き出される。高そうな銀色の腕時計に目を向けた男が、チツと小さく舌打ちをする。私はそれを横目に、空き缶を満載した自転車をゆっくりと押して進む。

高瀬川を越えたあの角で、ふと足を止めた。あの夜の目撃情報を求める看板が今も立っている。

だが一年以上も前のことをまだ覚えている人間が居るのだろうか。そんな私の疑問を形にするかのように、看板はあちこちがへこみ、傾いでしまっている。大方、酔っ払いにでも蹴倒されたのであろう。私は道で転んだ子供を助けるかのように手を差し出し、そっと抱き寄せて泥を払ってやる。痛かったろう、怖かったろう。そしてきちんと一人で立ったのを見届けて、私はまた自転車を押していく。

夏の終わりの陽射しに、鴨の流れが輝く。

その輝きに生命のみなぎりよりも目じりにたまった一粒の涙を思い浮かべるのは、私の気の持ちようのせいだろうか。時折銀色の腹を見せながらゆうゆうと泳いでいく魚の群れより、大雨で増えた水が引いたあとの淀みに取り残されて干上がるか食われるかを待つのみ魚に目が行ってしまうのは、自身の行く末にうすうす気がついていいるからなのか。

だが私は諦めるわけにはいかない。このまま安穩と拾い屋を続けて人生を終えるわけにはいかないのだ。あの忌まわしい夜の出来事が人々からすっかり忘れ去られても、出来事の張本人が必死になつてその記憶を封印しようとしても。

必ずこの手で見つけ出し、妻と娘を撥ね飛ばした拳句見捨てて逃

げた代償を払わせねばならないのだ。そうでなければ、私の存在価値など無に等しいではないか。復讐を誓い家を出たあの日、私は自分で自分の生き方を決めただけだ。

横を走り抜ける車の音にふと顔を上げると、通りの向こうに妻と娘が居た。今の生活を始めてからと言うもの、よく姿を見る。もちろん幻覚なのはわかってはいるが、つい手を伸ばしたくなる。しかしいつも手は届かず、やがて姿は消えてしまう。一度で良いからこの手で再び抱きしめたいというのに。

そして二人はまた寂しげな顔をしている。いつだってそうだ。私が決意を固め、さあこれからだというときに限って、そんな顔で現れる。伏し目がちなその表情には、以前の快活な面影はどこにも見当たらない。写真に残るあの太陽のように明るい笑顔はどこへ行ってしまったのか。

わかつてる、わかつてるんだ。今でも苦しいんだろ。憎いんだろ。早く私に復讐を遂げて欲しいんだろ。もう少しでたどり着けるんだ。例の車の持ち主がわかったんだ。あとはあのときの運転手を見つければいいんだ。な、父さんすごいだろう。よくやってるだろう。お前たちとの約束は必ず守るからな。だからそんな顔をしなくてくれ。どうやってやるのが心配なのか。そんな心配はお前たちはしなくていいんだよ。錦市場に老舗の刃物屋があつて、そこで切れ味抜群の包丁を買ってきたんだ。いつでも使えるようにな、ほらここに入れてあるんだ。お前たちの写真と一緒にかばんに入れてあるのを見たことがあるだろう。別に私は人殺しがしたい訳じゃないんだ。だから痛みを悶える奴の姿を楽しもうなんて思ってもいない。サクっと、そうサクっとやってしまえば終わりなんだ。お前たちに凄惨な光景を見せるわけにもいかないしな。これからこの空き缶を金に替えに行くんだ。そうして電車に乗って、大津へ行く。今日からしばらくは大津暮らしになりそうだな。なあに、家はしばらく空けていても何てことはないさ。誰が好き好んで乞食の家から

モノを盗るんだ。そして向こうの仲間にもうちよつと詳しい話を調べてもらうんだ。あとは運転手の一人でも脅して、あの日事故を起こした運転手を探らせる。そうすればまもなく事件は解決さ。そう考えると、警察なんて何の役にも立ってないな。こんな素人でも犯人探しが出来るのに。そう思わないか。さあ楽しみにしててくれよ。お前たちを苦しめた奴を懲らしめてやるんだ。父さん昔から言ってただろ。お前たちのためならどんなことでもするって。な、だからそんな顔をするのはやめてくれ。何が不安なんだ。何が不満なんだ。答えてくれ。私に教えてくれ。

なあ頼む！

気づいたときには大声で叫んでいた。いったいいつから声になっていたのだろう。道行く人があからさまに私を避けていくのがわかる。周囲から突き刺さる視線が痛い。それでも私は諦められずに問いかけ続ける。いったいどうすれば、何をすればまたあの笑顔を見せてくれるんだ。

低いうなりをあげて、目の前を観光バスが横切っていく。雄牛のような巨体に、妻たちの姿が隠れる。今日こそは消えなくてくれ、そして「答え」を教えてくれ。無駄なことと知りつつ祈る。だがやはり、白い排気ガスに混じってその姿は霧消してしまった。

どこにもぶつけようのない思いを残して、私は御池大橋の欄干に身を預ける。

鴨の流れは変わらない。妻と手をつなぎ歩いた思い出の日も、あの祇園祭の日も、そして今日も。私だけが生き永らえ、醜く変わってしまった。

鴨の流れはあらゆるものを流し去る。夜の闇も、世の芥も、心の憂さも。しかし流しきれない私の思いは澱となり、淀みを為して心をあの日のままだに堰き止める。

今日も私は生きる。光るあの日の思い出と包丁をずた袋に入れて

まだ見ぬあの者の血で澱を洗い流し、
全てを鴨の流れに解き放てる
その日が来るまで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661g/>

鴨の流れの

2010年10月8日15時08分発行